

飛び飛びの商店をつないだ「トビチ商店街」

【長野県辰野町】
下辰野商店街

中央アルプスの麓の町で人の輪が広がる

辰野町は、長野県のほぼ中央にあり、東京から特急列車を使い2時間半の場所に位置している人口約2万人の小さな田舎町。周りは山に囲まれており、町の85%が森林。明治時代には2つの路線の終点が商店街周辺にあったことから旅館や日用品店が並んだ。大正末期に2つの路線が連結されにぎわいの最盛期を迎えるが、その後モータリゼーションの影響で集客力のある店舗が郊外に移転。商店街内の道路も車のために拡張され、まちの景色が少しずつ変わっていく中、次第に人流も減少し、商店街に空き家や空き店舗が増えていった。

このような中、飛び飛びの商店をつないで商店街を再定義するという「トビチ商店街」の考えのもと、赤羽孝太（あかはねこうた）さん（一般社団法人〇と編集社代表）というコーディネーターが、地域の人とのコネクションをサポートすることにより、人の輪が広がってきており、現在も拡大中。その取組等についてお聞きした。



（提供：辰野町）

きっかけは偶然の出会い

そもそも、赤羽さんが辰野町で活動をはじめたきっかけは、辰野町役場の一人だけの商業担当である野澤隆生（のざわたかお）係長が関わっている。

野澤さんが東京国際フォーラムの移住セミナーで赤羽さんと出会い、カフェでお茶をし、その場で辰野町の集落支援制度を勧め、上司の課長に電話してOKをもらった。これをきっかけに、赤羽さんが辰野町でまちづくりに関わることになった。



左から、野澤さん、苔米地様（月夜野こまもの店）、赤羽さん

（撮影：中小企業庁商業課）

「トビチ商店街」という概念



商店街の10年後の未来を1日限定で実現したトビチマーケットの募集チラシ

(提供：一般社団法人〇と編集社)

赤羽さんは辰野町出身。進学を期に首都圏へ移り住み、就職した。辰野町に帰ってきて、お店を出すことになって感じたことは、「自分のやりたいことを押しつけてはいけない」ということだった。

商店街にはお店をこれからたたもうとする人もいる。そういった人たちに無理矢理なにかを押しつけてはならない。何かをしたい人が来る、お店を貸したい人が貸す、それでいい。みんながやりたいことをやっているだけで、誰かに何かを押しつけられているわけではない。店主やお客さんが「ユルく」つながり、情報を共有する。それが町のいろんなところで行われる。「トビチ商店街」は概念であると赤羽さんは語る。

シャッター街と言われればマイナスイメージが先行するが、赤羽さんは全く逆のイメージを持っている。お店が営業していなくて夜に明かりが灯らず暗くてもいい、それは営業して光っているお店を際立たせてくれている。自分の店を閉めてもそこに新しい人が入ってきてくれるという環境をつくり、新陳代謝が起きる仕組みを作っている。

空き家バンクの取組

まず、赤羽さんがはじめたのが、空き家バンクの活用だ。空き家バンクの立ち上げ当初は認知度も低く、平成26年当時は、登録数もまだ低い状態であったという。

どうして使われないのかを聞いてみると、「どう使われるのか・・・」、「片付けしてないよ・・・」、「どんな人が使うの・・・?」、「特に困っていないしな・・・」などの声があったという。

空き家の良い活用例がうまく伝わっていなかったことが主要因であることがわかり、空き家のDIYイベントを開催。工事業者だけでなく、移住者や事業者などみんなが参加できるようにし、地域の人たちも見学OKとしてオープン化した。これにより、こんな風にくらしてみたい、こんなお店がやりたいなどの人たちが増えていったのだという。

地域の人に良い活用例を知ってもらった結果、「いいじゃないの。」、「素敵な人に使って欲しい。」、「うちもやって欲しいわ。」という地域の人たちも増え、空き家バンクの登録件数も増加したという。



空き家 DIY 改修の様子

(提供：辰野町)

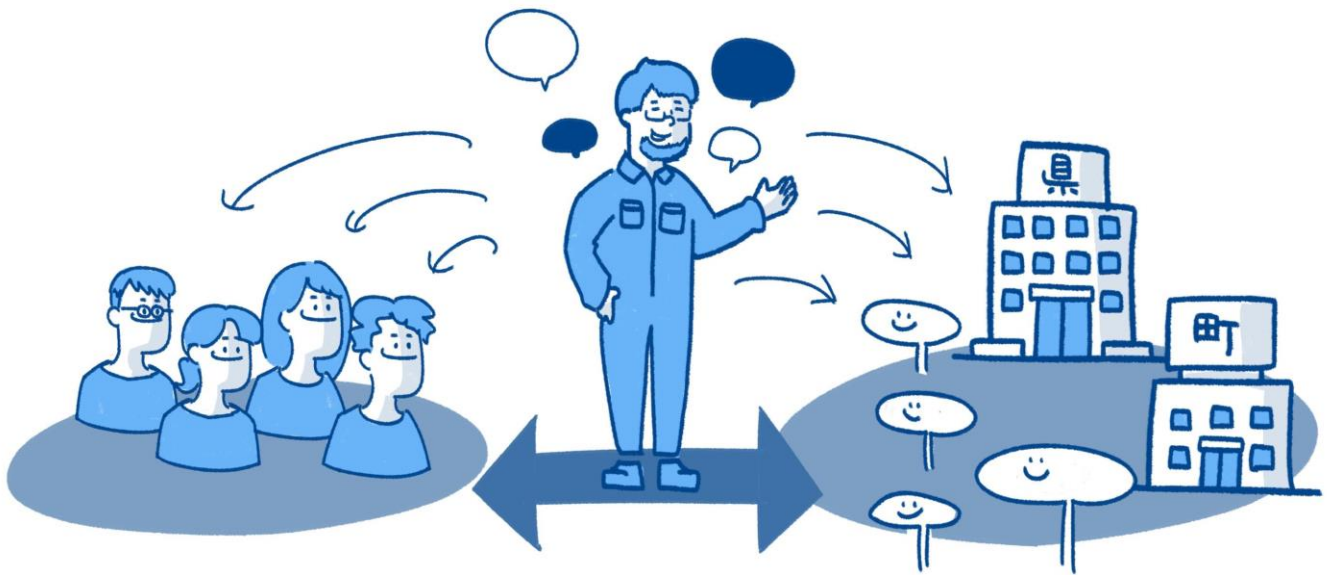
人と人との関係性を重視

この町に移り住み活動をする方は、赤羽さんとなつがり、赤羽さんと意気投合した人たちである。赤羽さんが「面白いな」と思った活動をしている人に声をかけ、この商店街で活動をはじめる。その人が「面白いな」と思った活動をしている人に声をかけ、この商店街で活動をはじめる…。1 人の人と繋がれば、その先にたくさんの方がいる。そうやってトビチ商店街の仲間の輪が広がっていった。

ローカルは能動的な人にとってはちょうどいい場所であると赤羽さんは語る。都会より地方の方が様々な道が開けているというのだ。地方では都会に比べて1 人の価値が圧倒的に高い。だから一人でできること、自分で何かを作り上げられることが多くある。ローリターンだがローリスク、そんな地方をあえて選ぶ人の一つの選択肢になるものである。

相対評価で育ち、良い大学を出て、首都圏大企業等で若くして成功するが、可処分時間・空間・所得が少ないことに気づき、相対評価を卒業して、三大可処分が大きく、豊かな余白（空き家、空き店舗のこと）で夢を叶えられる地方に本質的な幸せを求めるのではないかと。

第2のふるさとを持ちたい若者がアイディアを持って自ら行動し、ローカルドリームをかなえられる場所として辰野町を選んでいる状況になってきているという。



コーディネーターの赤羽さんが地域の人とのコネクションをサポート

(提供：辰野町)

空き店舗を活用してプレイヤーとして取り組まれている方々

赤羽さんをきっかけにプレイヤーとして辰野町で奮起している方にお話を伺った。

「&garage」

旧伊那バス辰野営業所の車庫を「&garage（アンドガレージ）」というカルチャースタジオ（ダンススタジオ）にリノベーションし、そこを拠点に活動されている鈴木雄洋（すずきかつひろ）さん。元々は財閥系大手不動産会社で働いていたが、それまでの新築によるまちづくりではなく、日本中に増え続けている空き家・空き店舗などのストック市場によるまちづくりの仕事を創りたいと考え移住した。自ら遊休不動産を活用する事業として始めたのがこの事業だ。自身のライフワークであるダンスを通して、新たな人の流れを町に作り、その新たな人の流れが新たな事業者を空き店舗に呼び込む鍵と捉えて、ダンス×まちづくりというユニークな事業に取り組んでいる。徐々に認知度は広まり、近隣の町から1時間かけてわざわざ通っている方もいるのだそうだ。



左から、鈴木さん、野澤さん、赤羽さん

（撮影：中小企業庁商業課）

「空間美術館」

旧商工会館を空間美術館（アトリエ）にリノベーションし、そこを拠点に活動されている千田泰広（ちだやすひろ）さん。千田さんは、世界的な光のアーティストでもあり、一年の大半をアメリカやヨーロッパを中心に活動している。日本に滞在している間だけ辰野町で空間美術館に携わっているという。空間美術館は、作品展示だけでなく、図書館（専門図書）、工作室、宿泊機能も備えた複合施設を目指しており、現在もステップアップ中とのこと。

現在、辰野町のまちなかを美術館に見立てて、空き家を展示会場とした美術展示「トビチ美術館」への展示作品の公募をしている。現時点で29件の応募があったがその7割は海外からのことであり、これは、千田さんの声かけによるものだろう。



千田 泰広さん



空間美術館の図書類



空間美術館内

（撮影：中小企業庁商業課）

「ゲストハウス兼シェアハウス」

廃業した旅館をリノベーションしてゲストハウス兼シェアハウスとして運営されている赤坂大介（あかさか だいすけ）さん。辰野町には宿泊施設が乏しいとのことから着手したもの。赤坂さんは、この商店街が地元であり、地域の方々の調整役にもなっている。〇と編集社の赤羽さんとの協力のもとに本事業に着手したとのことであり、まずはここを拠点に商店街で活動してもらい、チャレンジショップを実施し、最終的には実店舗経営に繋がりたいとの狙いがある。



左から、野澤さん、赤坂大介さん、赤羽さん



ゲストハウスの客室



シェアハウス
内装は入居者が自由につくる



交流スペース

（撮影：中小企業庁商業課）

その他、電気屋兼住宅を改修した月夜野こまもの店の苫米地花菜（とまべちはんな）さん、飲食店を改修したなとり音造の名取裕太（なとりゆうた）さん、中華料理屋を改修中で辰野町議会議員も務める本田光陽（ほんだこうよう）さん、薬局を改修した建物「イクイノックスストア」でアパレル、コーヒースタンド、美容雑貨のお店をそれぞれ営業している伊藤萌袈（いとうもえか）さん、大槻絵美（おおつきえみ）さん、高木尚美（たかぎなおみ）さんなど、多くのプレイヤーが空き店舗等を活用した店舗で奮闘していた。



苫米地さん



名取さん



本田さん



伊藤さん、大槻さん、高木さん

（撮影：中小企業庁商業課）

トビチ商店街とまちづくり

まちづくりは「土づくり」

赤羽さんは自らの活動を「土づくり」と捉えている。まちづくりは農業であり、森を切り開いて切り株を引き抜いて畑にして、土をつくる。そして、どんな作物を作るか考え、作物を植えて収穫する。赤羽さんは、土をつくるまでしか行わない。作物を作りたい人にその畑を譲り、〇と編集社は次の畑の開墾に移るのだそうだ。

〇と編集社は細かなマネジメントは行っていない。全体として「トビチ商店街」というリブランニングは行っているが、町がどうなったら楽しそうか、面白そうかという際の地域調整を行っているに過ぎない。戦略性を持ってまちをデザインするのではなく、いろんな属性の人たちが集まる「カオス」の偶然性の面白さを楽しむ。属性の異なる人と人との間に生まれる化学反応を楽しむのだという。

10年後のぼんやりした町のイメージに向かって現在活動が続けているが、決してそのイメージにはこだわらず、最終的に「楽しいまち」であればいいというのが赤羽さんのまちづくりである。

また、野澤さんは、はじめは自分1人で行っていた活動が、赤羽さんをたまたま見つけ、だんだんと人が人を呼び、新たなネットワークとして広がってきている、と振り返る。野澤さんは公務員であるため、いつかは人事異動で担当から外れる。それを前提に活動し、既に自分がいなくても持続的に動いていける段階になってきていることを実感しているとのことだ。

「トビチ商店街」のこれから

「トビチ商店街」は、中小企業庁の「地域商業機能複合化推進事業」を活用しながら、空き店舗を多様な属性の人が交わる空間に生まれ変わらせ、こうした取組をきっかけに新たな人流を生み出している。

旅館をリノベーションして新たに整備したゲストハウス兼シェアハウスでは、域外から来られた宿泊者に対し、商店街の日用品や野菜などの購入、テイクアウトや出前サービスなどの利用を促し、新たな回遊の創出につながる仕組みもつくりはじめている。

商店街に今までなかった機能が1つ1つ加わり始めたことで、新規店舗の周囲にまた新たな店舗が出店する好循環が生まれ、前述のダンススタジオ「&garage」の隣に、古着屋が新たに新店舗を出店したような変化が地域に起き始めている。また、チャレンジショップとして東京の大学に通う学生が学習塾を開き、軌道に乗ってきたことから、実際に商店街内で学習塾を正式に開業するといった例もあるようだ。

この数年間の内に商店街内の空き店舗の利活用も着実に増え、2017年4月から2022年1月の間に38店舗が新規出店を果たし、今では様々な世代の新たな来訪者が訪れる商店街となり、既存店舗にも好影響を与え始めている。

野澤さんは、面白い人や企業が、それぞれのつながりで面白い人や企業を集めてくるスピードが加速していると語る。この秋には日本最大のクラフトマーケット企業が商店街と共創し、空き店舗を活用したクラフトイベントを開催することとなった。地域の空き家や空き店舗を活用し、クラフトを核としたイベントを実施することで、全国のクリエイターに空き家や空き店舗を活用した、ものづくりのある暮らしを体感してもらう。イベントに参加した人の中から、このまちを拠点に活動するクリエイターが現れるかもしれない。

このまちの人たちは、ぼんやりとしたイメージに向かい、自らのやりたいことを突き詰めている。人が人を呼び、人が集まってくる。10年後の「楽しい」トビチ商店街の姿は誰にも想像できない。



(提供：一般社団法人〇と編集社)